

## 特待生制度について

～「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 事業結果報告書から抜粋～

### 目標計画の達成状況

特待生制度は、優秀な学生を獲得するとともに、彼らの自主性を養い社会をリードする人材へと育成することを目的に、平成 17 年度から開始した制度である。「魅力ある大学院教育」イニシアティブの採択をうけて平成 17 年度は 9 名の特待生を採用した。平成 18 年度には、特待生制度の充実に力を注ぎ、平成 18 年 4 月入学時より 7 名の特待生を受け入れ、さらに、5 月に在学中の博士前期課程学生を対象に特別枠特待生 6 名を追加募集した。前年度より継続の 7 名を加えて、平成 18 年度は総計 20 名の特待生を採用した。このように当初の特待生制度拡充の目標を達成した。

### 特待生制度の趣旨と内容

特待生制度は、奈良先端科学技術大学院大学・情報科学研究科の博士前期課程学生を対象に、豊かな独創性と研究への熱意にあふれ、修了後は研究者や技術者として大いに社会をリードすると見込まれる学生を特待生として選抜するもので、制度の特徴は以下の通りである。

特待生の独創力を伸ばし、特待生同士のつながりも重視したプロジェクト研究を実施し、そのために必要な物品の購入等、経済的支援を行う。

海外の大学が主催するセミナーや国際会議への参加など、特待生の国際化活動への経済的支援を行う。

その他、新入生に対しては、学生宿舎への優先的入居を保証し、日本学生支援機構第一種奨学生へ推薦する。また、特待生であることを成績証明書に記載する。

### 特待生制度年間スケジュール概略

[ 博士前期課程 1 年生 ]

- ・ 4 月 キックオフミーティング チュータ決定
- ・ 5 月 - 11 月 「特別演習 ( 6 単位 )」: 所属研究室以外の複数の研究室を巡るインターンシップ
- ・ 5 月 - 年度末 海外研修国際化活動
- ・ 8 月 - 2 月 特待生プロジェクトの計画と実施: 月 1 回の経過報告会実施
- ・ 1 月 - 3 月 特待生編集委員会の編成と活動: 当該年度特待生プロジェクト活動報告書作成

[ 博士前期課程 2 年生 ]

- ・ 4 月 - 年度末 前任特待生として新特待生をサポート
- ・ 5 月 特待生活動発表会
- ・ 4 月 - 年度末 特待生プロジェクトの継続, 月 1 回の経過報告会, および, 海外研修: 帰国後に報告書提出

### 特待生制度実施状況

特待生はそれぞれプロジェクト研究と海外研修国際化活動を実施し成果を上げた。特待生には所属研究室の助手クラスの教員がチュータとして指導にあたるとともに、教務部に特待生タスクフォースを設け、研究科を挙げて活動をサポートする体制を組んだ。

平成 17 年度プロジェクトの具体例としては、3 名が協力して共同研究として取り組んだ、「学研

北生駒(先端大学前)駅構内案内ロボット開発プロジェクト」,留学生が中心になって企画した海外教員・学生(フィリピン AdMU:Ateneo de Manila University)招聘プロジェクトとシンポジウム(Increasingly Ubiquitous AdMU in NAIST)開催,あるいは,自分自身もオープンソース開発者として活躍している特待生の支援プロジェクトなどがある。最初の対外的な活動として,年度末に開催された全学的行事「けいはんな新線開通記念」フェスティバルに駅案内ロボットを展示し,特待生プロジェクト活動紹介パネルを設置した。また,年度末には平成17年度特待生活動報告書を作成し,研究科のアドバイザー委員会メンバーや学内関係者に配布した。

平成18年度には後期課程に進学した特待生OBも協力して活動した。平成18年5月8日に平成17年度特待生活動報告会および平成18年度特別枠特待生追加募集の説明会を開催した。特待生追加募集には情報科学研究科の一般学生の関心も高く,21名の応募があった。研究科長,副研究科長,教務部会特待生タスクフォースを含む数人で,2度の面接を実施し,6名を特別枠特待生として追加採用した。

平成18年度プロジェクトの例としては 駅構内案内ロボットや情報科学研究科案内掲示板システムの研究開発など研究系のプロジェクト,オープンソース活動やビジネスプランコンペティションに応募して受賞するなどの個人的対外活動の他に,平成18年9月9日に学長や本学理事を審査委員として迎え全学的行事として実施したNAISTサイエンスオリンピック,留学生を組織して半期にわたって実施したLanguage Exchange Program [Simply Speaking - えいごしゃべろうかい-],11月開催の神経経済学セミナー,12月開催の女性研究者のためのキャリアアップセミナー,平成19年1月のフィリピン Ateneo de Manila University の学生4名を6週間の短期留学に招く交流企画,子育て勝手に支援プロジェクト,2月開催のNAISTアートフェスティバルなどがあげられる。さらに,平成19年1月18日開催の情報科学研究科FDシンポジウムにおいても,特待生による本研究科FD活動の評価や問題提起があった。年度末には,これらのプロジェクトに関する詳しい内容を記した平成18年度特待生活動報告書を作成し,配布した。

このように,アドバンスプロジェクトとしての特待生制度充実の取り組みについては,当初の計画を着実に実施し,大学院教育の実質化に大きく貢献したと考える。

### **特待生制度実施の成果**

この特待生制度では,特待生がそれぞれの所属研究室で与えられた研究テーマとは独立して,自主的に研究プロジェクトを企画する。このための研究費を本補助金で支給することによって,これらの研究プロジェクトを実際に実施して成果を挙げることが可能になった。自分で発案した研究課題やイベントを企画し,それを実施して成果をあげることによって,特待生がそれぞれに達成感をもち,自らの能力と実行力に対する自信を得て,自主性をのばし,将来社会的にリーダーシップを発揮するための良い経験を積むことができた。すなわち,自立した研究者や技術開発に携わる人材を養成するという大学院教育の目的を実質化できたと考える。

また,海外研修国際化活動の補助によって,研究者として巣立つ前の早い段階から,国際学会に出席して,あるいは海外の一流の研究室を自主的に訪問して,世界水準の学術的雰囲気に触れさせることができた。この経験は,各特待生に,英語コミュニケーションの重要性を気づかせるとともに,今後の研究意欲を大いに増進させる効果があり,国際学会での発表にも積極的に挑戦する機運を生んでいる。

### 現状に対する自己評価

この制度は情報科学研究科にとっても初めての試みであり、2年間手探りでこの制度を運用してきた。平成18年度は前年度と比べて採用人数が増えたことと、先輩後輩関係ができたことが良い影響を及ぼして、活動の様態がより広がったといえる。

2年間の活動成果として、これらのべ22名の特待生は自らの研究プロジェクトと海外研修を達成し、それぞれに自信を持ち一回り大きく成長したように見える。この事業の実施は自主性を育てるための大学院教育改善の方向性を考える上で、具体例として十分な効果があった。すなわち、このような一定数の選ばれた特待生を核として、学生の自主的行動能力やコミュニケーション能力を開発し、それを研究科全体に波及させる取り組みの成功は、今後のわが国の大学院教育の実質化への先行的な一事例となるものである。